

# 高等学校古典の授業へのアクティブ・ラーニング導入に関する一考察

## A Study on Active Learning Introduction to High School Classical Classes

鈴木 晴 久

Haruhisa SUZUKI

(和歌山県教育センター学びの丘)

佐 藤 史 人

Fumito SATO

(和歌山大学教育学部)

2017年9月15日受理

### abstract

Attempts to introduce active learning at each school have been attempted, but learning outcomes can be hoped by just “talking” rather than “learning”, more extremely speaking “chatting” There are also reports that there is no. In Japanese language classes in particular, this kind of thing often occurs in reading comprehension of sentences.

Even in classes using active learning, unless the lesson students grasp the level and viewpoints that the students can read and devise measures to raise the reading to a higher level, It is inferred that it will be confirmed the contents of the same level and become “chat” as described above.

In order to solve such a problem, it is necessary for the lesson to take a higher viewpoint and improve the students to a higher level of understanding. If you do not do it, lessons of reading and understanding of sentences by active learning will not be established.

Here, we aim at considering the class of interpretation of Waka by active learning from the deepening of grammatical matter.

### 1. はじめに

中央教育審議会は、平成28年12月21日付け答申『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について』において、アクティブ・ラーニングを子供たちの「主体的・対話的で深い学び」を実現するために共有すべき授業改善の視点として、その位置付けを明確にするとし、「子供たちが、習得した概念や思考力等を手段として活用・発展させながら学習に取り組み、その中で資質・能力の活用と育成が繰り返されるような指導の創意工夫を促していくことが求められる。」としている。

学校においても、このアクティブ・ラーニングを導入することがそれぞれ試みられているが、答申でも「「アクティブ・ラーニング」の視点については、深まりを欠くと表面的な活動に陥ってしまうといった失敗事例も報告されており」とあるように、「学習する」というよりも「話し合っている」、もっと極端に言えば「雑談をしている」だけで、学習成果を望めないという声も聞く。特に国語科の授業では文章の読解に於いてこういうことがしばしば指摘されている。

文章は読んでもらうことを通して人に伝えるものであり、読めばわかるように出来ている。しかしながら、読み手の読解力のレベルによって、その内容の捉え方

が異なるのも事実である。例えば、同じ作品を年月を隔てて読んだ場合、印象が大きく変わることもあるし、様々な体験や修得した知識等によっても読み方が変わってくることもある。

しかし、西林克彦が指摘しているように、\*1文書をよりよく読もうとする際に、読み手にとって最大の障害になるのが、自分自身の「わかった」という状態である。人間は知らないことを理解することに対しては食欲であるが、一度「わかった」と思ってしまったらそれ以上の理解は求めることは少ない。

文章を読むことにおいても同じである。例えば自由読みをした後に児童・生徒がそれぞれの能力等に応じてその文章を「わかったつもり」になったらそれ以上を求めることはない。従って、読みの授業では、授業者はそうした児童・生徒の読解のレベル・視点等を授業を通して、より一段高めることが必要である。

アクティブ・ラーニングを使った授業においても、授業者が、児童生徒の読むことのできるレベル・視点等を把握して、より高度なレベルまで読みを引き上げる工夫をしなければ、児童生徒の話し合いは、同じレベルの内容の確認になってしまい、上記のように「雑談」になってしまう可能性がある。

ここでは、古典の授業におけるアクティブ・ラーニ

ングの導入について、和歌の解釈を事例に考察する。

## 2. 文学教育について

国語教育には、言語教育と文学教育という二つの領域があるが、明治から大正にかけて、言語教育から文学教育へ重心が移った。教科書も大正期には児童の生活を中心とした読み物の比重が高かったが、戦後、本来国語科の中に文学教育的なものを置くべきではないという考え方が一般化し、教科書にも言語系の材料が「説明的文章」として取り入れられるようになった。

また、昭和24(1949)年からは、時枝誠記と西尾実の間で、言語教育か文学教育かで論争があった。これは文学を読み解く方法の修得を重視するか、文学活動を経験させることを重視するかというものであった。

このように、言語教育と文学教育を巡って論争が続いていたが、文章を読み解くためには、言語としての読解の課程が必ず必要であり、読みの方法や技術が重要になると同時にそこには文学体験が成立する。読解過程抜きの文学体験、文学体験なしの読解は両方とも成立しない。従って、言語教育と文学教育は二者択一的なものではなく、どちらに重点を置くかで方法論や教育論を生んできたが、2つの方法を発展的に止揚した方法論・教育論が求められている。

## 3. 従来の古典的教育について

古典的教育とは、日本の古文及び漢文(日本漢文を含む)を対象として行う教育のことである。古典的教育では、戦前から現在まで、いわゆる訓詁注釈的な指導が多く行われてきた。文法事項から始まり、教材文の単語の解釈、文章全体の解釈といった作業をこなし、正確な表面上の読み取りに終始してしまう。時代的な背景や代表的な鑑賞について触れることもあるが、それにしても一般的な鑑賞を知識として伝達しているに過ぎず、生徒の感性や感覚を刺激するような所まで達していない授業がほとんどである。

古典で扱われる古文や漢文は、単なる古い文章ではなく、文学的価値が高い文章でもある。それは、書かれてから現代に至るまで、各時代の読者の鑑賞に堪えてきたということであり、現代には現代の解釈が可能であることを意味している。

宮原修は、古典について、「子ども一人一人の緩衝能力を高めることによって、文化の創造に貢献できる人間を育てることが期待される」とし、そのために「教科書をはじめとする教材教具によって、子ども一人一人を様々な種類の古典と出会わせることが大切である。」としている。<sup>\*2</sup>

このように、古典教材を現代的に取り扱うことに対して、種々の提言や方法が提唱されているが、その多くが、例えば、やさしい文章や写真、スライド、コピー、フィルム等を使ったり、あるいは同じ内容を扱っ

た他の作品と比較するといった、古典のテキストを取り巻く所での工夫や読解後の取り扱いでの工夫であり、テキストの読解自体に対する工夫についてのものは少ない。

しかしながら、高等学校における古典の授業は、文法事項から始まり、語釈、解釈、鑑賞というながら主流であり、古文に親しみのない生徒にとっては必要な作業である。

また、この部分をおろそかにすると読み取りの正確さが曖昧になり、意味を把握できない可能性もある。表現や内容が現代のそれとかけ離れば離れるほど、こうした読みの技術が重要になってくる。

## 4. 和歌教材について

長谷川孝士が述べているように、和歌は一般的に児童・生徒の言語生活・読書体験になじみが薄い。従って、国語教室における近代短歌・古典和歌との出会いは重要な意味を持っている。どのような作品と出会うかによって、感動あるいは興味関心の持ちようが異なってくるからであり、ただ、教養主義的な立場で文学史的著名度などのみから教材を選定するのではなく、学習者の意識や能力などを考慮して教材化することが必要である。<sup>\*3</sup>

また、教材研究の段階で、作品研究だけでなく、学習者の読みのつまづきや反応の予測、解釈・鑑賞に必要な語句・表現についても予め準備しておく必要がある。

## 5. 古典の授業におけるアクティブ・ラーニングの導入について

3で示したように、従来の古典の授業は、文法を中心とした言語としての読解の課程に重点が置かれている。この文法を体系的に深めることは、高校生の学習範囲を超えている。これにアクティブ・ラーニング型の授業を取り入れるのは困難であると類推される。しかしながら、従来の研究の成果を導入することで、アクティブ・ラーニング型授業を行うことは可能であると考える。

また、言語としての読解の課程に重点を置いているからこそ、その部分を扱う方が可能性が広がる。

ここでは、古今和歌集の藤原敏行の和歌を教材として、アクティブ・ラーニングの可能性を考察する。

## 6. アクティブ・ラーニングを用いた古典の授業

(1)教材：古今和歌集、藤原敏行の和歌について

秋立つ日詠める

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる (下線筆者付) 藤原敏行朝臣

この和歌は古今和歌集 巻第四 秋歌上 の最初に

おさめられており、高等学校だけでなく、小中学校の教科書でも取り上げられている立秋の歌である。秋の訪れを視覚ではなく聴覚で捉え、非常に平明な表現を用いており、内容的にも捉えやすい句である。また、文法事項も、完了の助動詞「ぬ」の使い方、係り結びの法則といった典型的な文法事項が使われているので、今回の考察に適していると考えられる。

この歌について、『日本古典文学全集』では、「立秋の日に詠んだ歌「ああ、秋が来たな」と、景色を目で見たところでは、はっきりとはわからないが、風の音を耳にすれば、自ずからはっきりと、秋の訪れを感知する。」と解釈されており、「目に見る風物にはまだ変化が現れていないのに、風の音に秋の訪れを感知したというのは鋭い神経である。とくに朝夕の風にそれがいち早く感じられるが、歌の調べもその秋風をきいているような感じである。」と解説している。

また、語釈についても、「さやか」は「冴えてははっきりすること。」「風の音にぞ」は「風のほうには」で、「音にぞ」んの「ぞ」は第二句「目には」の「は」と対する。「おどろかれぬる」については「秋が来たなと、しぜんにはとさせられる。」として「れ」（終止形は「る」）は自発、「ぬる」（終止形は「ぬ」）は確定的事実の判断を表すとしている。

この和歌について、訓詁注釈的な指導を行うと、文法的には、完了の助動詞「ぬ」について、特に打ち消しの助動詞「ず」の連体形との相違、連用形接続であることから「来」が「こ」（未然形）ではなく、「き」（連用形）と読むこと、「ぬる」が完了の助動詞の連体形であり、上の「れ」が助動詞「る」の連用形であること、「る」が心情を表す動詞につく時は「自発」の意味になることが多いこと、「風の音にぞ」の「ぞ」が係り助詞で「ぬる」と係り結びをなしていること、それとの関連で、「目には」の「は」も係り助詞ではあるが係り結びを作らないことを指摘し、上記の語釈を加えて全体の歌意の解釈をする。

その際、係り結びを作らない「は」と係り結びを作る「ぞ」の強意の程度を考えさせ、そうした所からもこの歌が視覚ではなく聴覚による歌であることを理解させる。

このように文学の言語教育的な面からの指導にいかせる教材であり、立秋という現代でも共通する出来事を視覚でなく聴覚で捉えるという点で、文学体験の指導にも使える教材である。

しかしながら、非常に平明な表現であるために、言語教育的な面でも文学体験の面でも一通り指導してしまおうと生徒はその理解で満足してしまう。西林のいう「わかったつもり」の状態になるのである。

## (2)完了の助動詞「ぬ」について

この和歌には完了の助動詞「ぬ」が使われているが、

この「ぬ」について、その内容を教科書からさらに深めてみる。

完了の助動詞には他に「つ」がある。この違いについて、『七訂版 読解を大切にする体系古典文法』では、「つ」は人為的・意志的な動作を表す動詞につく場合が多く、「ぬ」は、自然的・無意志的な作用を表す動詞につく場合が多いとしている。<sup>\*4</sup>

大野晋は、「ぬ」がナ変型活用であることから、その語源が「去(い)ぬ」であるとしている。その上で、「去ぬ」は、自然の成り行きとして、いつの間にか目の前から去っているという意味だから、ある動作・状態が成立したとき、それが自然の成り行きとして確定的に成立した、あるいは、自然の成り行きとして確認されるということを表したと述べている。

一方「つ」については、やはり下二段活用であることから、棄てるという意味の「棄(う)つ」が語源であるとし、これは動作の主が意志的に、作為的にする動作で、目の前にほうり出すという意味であるとしている。

さらに動詞「あり」への接続に言及して、「ぬ」が眼前から消え去る意味を持っているので「ありぬ」という連続は意味上矛盾するから使われず、ほうり出して眼前に結果が残存する意味から「ありつ」を使うと考察している。<sup>\*5</sup>

## (3)「ぬ」の考察から見るこの和歌の文学体験

つまり、単純に捉えれば、「ぬ」はなくなった結果であり、「つ」は何かを行った結果であるといえる。この歌において、自然の成り行きで確認されるのは「秋」であり、何が過ぎ去ったかと類推すると、「夏」である。ここに「夏が過ぎ去って秋になった」という事実が浮かび上がる。

古今和歌集の時代に、夏が過ぎゆくのを惜しむ習慣があったかどうかは定かではない。古今和歌集巻第三夏歌にはそういう趣の歌はない。旧暦とはいえ、夏は4月、5月、6月であり、七夕が秋の行事であるように、当時の人々と現代の我々では感覚が違う可能性もある。

しかしながら、前述したように、古典の価値の一つはその時代の解釈に耐えられるところであり、現代的な解釈で鑑賞しても問題はない。むしろ、現代的な解釈で鑑賞する方が古典教育の趣旨に合っている。

大切なのは、この文学体験にどうやってたどり着かせるかであり、そのために以下の方法を提案する。

## (4)アクティブ・ラーニングを用いた和歌の授業

今回の授業では、まず最初に上記の「つ」と「ぬ」の違いについて既習事項<sup>\*6</sup>以外にはふれないで、まず、「ぬ」を「つ」と入れ替えさせる。

「秋来つと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれつる」としてみて朗読し、その感じや印象を



比較させるために、グループで話し合いをさせる。特に音の響きに注目して話し合わせる。これは、古典文学全集の解説に「歌の調べもその秋風をきいているような感じである」とあるように、和歌が音として発せられるものであることの認識を意識した指導である。

次に、「つ」と「ぬ」の相違について講義を行う。この部分では、「ぬ」に関しては、ナ変活用動詞が「死ぬ」「往ぬ」の2つしかないことから、「ぬ」が「往ぬ」から派生していること、従って目の前から去ってしまうことを話し合わせてもよい。「つ」は「棄つ」という言葉自体が古典でもあまり使われない言葉であるため解説する必要がある。

次にこの歌ではなぜ「つ」でなく「ぬ」が使われているのか話し合わせる。

これは2段階で話し合わせる。

1つは「ぬ」の接続から考えさせる。講義内容にあるように、「ぬ」が自然的・無意志的な作用を表す動詞につき、「つ」が人為的・意志的な動作を表す動詞につくという点からである。「来」というカ変動詞は「来る」という意味であり、現代の用法からは区別しにくいかもしれないが、主体が「秋」であることから「秋が来る」ということがどちらなのか考えさせる。「おどろく」という動詞は「自然とはっとさせられる」という意味であるから、自然的・無意志的な作用を表す動詞であることが分かるが、これも現代的な語感から、作為的・意志的な動詞ではないかと疑問を持ち、指摘する生徒がいるかもしれない。その場合は「おどろかれぬる」の「れ」が何かを考えさせる。生徒から答えが出ることが望ましいが、出ない場合は文法の教科書で助動詞「る」を調べさせ、「る」が「思ふ」「しのぶ」「ながむ」など心情を表す動詞につく場合は「自発」(自然とそうなる)の意味になる<sup>\*7</sup>ことを確認させ、「ぬ」が接続することを理解させる。

2つ目は「ぬ」が目の前から去っている意味を持つことに着目させ「何が去っているのか」について話し合わせる。

話し合いが円滑に行かない場合は、「秋が来たということは」といったヒントを出してやってもよい。こうすることで、この和歌が「秋が来た」という意味を持つとともに、「夏は去ってしまったんだなあ」という意味を持つ可能性に気づかせる。

この和歌が去りゆく夏を惜しむ意味を持つかどうかは異論があるかもしれないが、少なくとも最初の読みよりは深められたと考える。

また、近代以降、「夏を惜しむ」ことは既成の事実であり、種々の文学作品で取り扱われている文学体験である。

少し複雑な文法事項を通して、自分たちで考えたことが、こうした文学体験に到達できればかなりの成就感が得られると考える。

大事なことは、教授者が予め生徒の授業での理解を予測し、それより高いレベルに教育目標を設定し、そこに到達するために、どのような材料を与えて、どのような展開を準備するかに係っている。その際には展開に対する生徒の理解度も考えておく必要がある。

また、到達した目標が生徒に成就感を与えられるものであるかどうかを吟味する必要もある。

アクティブ・ラーニングを、先生が何も教えない授業であると理解する向きもあるが、準備段階も含めて、かなりの準備を要するし、どれだけ考えて、準備するかが授業の成否に大きく影響するやり方である。

## 7. 終わりに

アクティブ・ラーニングでいわれていることは、これまでの授業理論や授業実践で提唱され、取り組まれてきたことであって、決して新しいものではない。ただ、それが普及して、浸透していたかという点で疑問である。

情報機器が発達し、情報が氾濫する中で、主体的に生きていくためには、それぞれの情報を取捨選択し、自分自身で物事を考えていく必要がある。そのためにも授業に於いて生徒が自主的に考えるアクティブ・ラーニングの方法は有効であると考えられるが、その際には児童生徒の理解をより深めるという視点を忘れてはならない。その上で、教科の特性や授業の条件等に合わせて、工夫してやる必要がある。

今回は、文法事項を使った古典の和歌の解釈を試みたが、他にも視点や方法は様々にあると考えられる。今後はそういった視点や方法を使ったアクティブ・ラーニングの授業への導入について研究を続けていきたいと考えている。

## 注

- \* 1 『わかったつもり』 H17(2005)年9.20発行 光文社新書 p3～p42
- \* 2 『新教育学大辞典』平成2(1990)年7月31日発行 第一法規 第3巻 p276
- \* 3 国語教育大辞典 明治図書 1991.7 p874
- \* 4 平成20(2008)年11.1発行 p56
- \* 5 『古典文法質問箱』平成10(1998)年12月25日発行 角川文庫p158-159
- \* 6 「つ」「ぬ」が完了・強意の助動詞であることのみ確認させる。
- \* 7 『七訂版読解を大切に体系古典文法』 p49